



Title	『日本の動物観 人と動物の関係史』石田 輯・濱野佐代子・花園 誠・瀬戸口明久〔著〕（東大出版会，2013年3月，288頁，4,410円（税込み））
Author(s)	大館，大學
Description	書評
Citation	哺乳類科学，53(2)，393-394
Issue Date	2013
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54603
Type	article
File Information	53_393-394.pdf



になるのかは、恣意的ないし政治的な意思決定を伴う。これらは単なる生物学的（動物学的、生態学的）問題ではなく社会学的・政治的問題でもあり、社会のコンセンサスのもとに事業が展開されるべきである。つまりこのような“野生動物”問題は、動物観を含めた自然観に根本的に依存していることを十分に認識すべきであろう。さらに著者は、日本人の動物観と科学的な野生動物管理施策とのズレが生じ、欧米とは異なる難しさが生じつつあることを指摘している。今後の野生動物管理学は、欧米の理論を直輸入するだけでなく、日本社会独自のあるいは日本人の動物観に合致した理論の発展が必要となってくるということであろう（野生動物管理学の“ガラパゴス化”の必要性とでも言うべきか？）。また些細なことであるが、この章の最後に「ゲノム時代の動物観」というフレーズがあるが、私にはゲノムという言葉の使用に違和感を感じた。これは単に「遺伝子時代の動物観」といえば十分であり、わざわざ“ゲノム”という限定的な用語を使う必要はなかったかもしれない。

第IV章（展示動物）では動物園や水族館での動物の扱いと日本人の動物観が論じられている。著者によれば、動物園への訪問者が求めるものと動物園側が掲げる自己の存在意義についての齟齬が大きくなりつつある。動物園の維持には多大な労力とコストがかかるために、運営をしていくことは容易ではない。動物園等が存在し続けるためには、どのような方向性をもって経営するかを日本人の動物観と動物園の関係に基づいて永遠に考え続けなければならない、というのが著者の主張したいことであろう。

終章（「動物観のこれから」）では、日本人の動物観が少しずつ変化しており、ペットから、産業動物（特に食肉用）、展示動物、野生動物にいたるまでの動物の扱い方の変更が必要であるとの主張がなされている。この章で気になったのは、エゾシカ被害とその防止のための狩猟と殺処分は、「食べる」という行為によって社会的に許容されているが、多くの人は、その「殺戮」の実行者にはなりたがらず、誰か他の専門家が実行することを望んでいる、という記述である。さらに、その殺戮専門家は「後ろめたさ」を解消するための慰霊や儀礼手続きが必要であると述べられている。しかし、これは本当だろうか？私もそうであるがエゾシカの狩猟者の多くは、自ら進んで「楽しんで」狩猟しているのであり（有害獣駆除の場合はなかば義務的に行うので多少状況は異なる）、後ろめたさなど持っていないのが普通である。このシカを殺したあとに慰霊や儀礼をするというのは、どの地域のハンターの習慣であろうか？本土の伝統的猟師（九州の猪猟

師や東北のマタギなど）や北海道のアイヌ系のハンターの間では何らかの儀礼を行うとされているが、近年の多くのスポーツハンティングでは儀礼的なことを行っているということは、私は寡聞にして知らない。この「後ろめたさ」と儀礼については、シカ猟の狩猟者の意識調査を行い地域差も考慮した具体的データが必要であろう。

以上で各章の内容の紹介を終えるが、本書のさらなる理解のために類似の単行本やシリーズのいくつかを紹介したい。一番はじめに紹介したいのは、「日本人の宗教と動物観 殺生と肉食」（中村生雄著、吉川弘文館、2010年）、である。この本の著者は、動物観、ペット論、狩猟文化、オオカミ問題、食肉問題などについて論じており、単著にて今回紹介の本よりもさらに一貫した論が展開されている。また宗教観だけでなく動物観全般についても多くが語られている。また「日本人」という場合の多くは、ヤマト人ないし南九州のクマソや東北のエミシの末裔つまり本土文化人しか扱わないが、この本ではアイヌ人、南西諸島人も「付録」ではなくレギュラーな日本人の範疇に含めて論じている。この本の著者の知識と理解の深さには敬服する。惜しむらくは、出版直後に著者が亡くなられたことである。また以下の二つのシリーズも紹介せねばなるまい。一つ目は「人と動物の日本史 1-4巻」（吉川弘文館、2008-2009年）である。このシリーズでは考古学から狩猟史、宗教史まで広範囲に日本における動物との関連史が扱われ、人と動物の関係に興味を持つ人にとっては重要な参考図書である。次は「ヒトと動物の関係学 1-4巻」（林 良博ほか編著、岩波書店、2008-2009年）である。このシリーズは多数の著者によるために各記事や巻の間で論の展開において一貫性に欠ける印象を受けるが、裏をかえせば様々な立場の考えが紹介されているので、この方面の研究の実態を知るには欠かせない。評書「日本の動物観」は以上の著作を受けて出版されており内容的には最新となっているので、最初に「日本の動物観」を読んでから以上の本を読むとこの領域の近年の動向が良く理解できるであろう。

大館大学（北海道大学低温科学研究所）

✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp

『決定版 日本水族館紀行』

島 泰三 [著]、阿部雄介 [写真]

（木楽舎、2013年、240頁、2,940円（税込み））

信念の人、島 泰三さんの筆が躍る。頁全面を極彩色に飾るのは、阿部雄介さんが切り取った人々の笑顔の一